

明治・大正期福岡県筑豊地域における醤油醸造経営の展開と地域性

田中 醇

本論の目的は、福岡県筑豊地域における醤油醸造家の醤油製造過程・販路展開分析を通じて、醤油醸造業と地域の関係、中でも炭鉱との関係を考察し、地域性について明らかにすることである。

福岡県嘉穂郡に所在する醸造家許斐家は、近世来地主として筑豊における炭鉱とのつながりが存在しており、本論の分析対象として適当である。

20世紀初頭の許斐家の代替わりによって、醤油醸造経営が本格的に改善され始め、1910年代半ば頃までには醸造方法の改善が完了し、松喜醤油なりの「上印醤油」が製造、販売されることになった。

ただし、その時点での「上印」は消費者に受け入れられず、販売石高は拡大しなかった。これは、消費者の嗜好と合致していなかったことが要因であった。

すなわち、市場で需要されていた「最上品」の嗜好と、この時期までの松喜醤油が目指していた醤油品質向上の方向性が合致していなかったのである。

そうした中、第一次大戦の影響によって大豆・小麦などの原材料価格が高騰し、醸造業者は、醤油価格を向上させることで対応した。

ただし、松喜醤油はこのタイミングで、販売醤油価格を相対的に安価に設定した。醤油価格を安価に抑えるために、諸味から得られる醤油量を上昇させた。そしてそこに甘味料を添加することで、一定の醤油品質も保とうとした。

こうした松喜醤油の選択には、1918年の「炭鉱米騒動」で炭鉱労働者が求めた日用品の値下げが影響していた。

炭鉱労働者の中でも「最上品」を需要していた層の嗜好は、甘くて粘稠性のある醤油にあった。

この特徴は、北部九州で生産・消費されていた「再仕込醤油」と類似したものであった。こうした傾向が松喜醤油の供給する醤油と合致することで経営の拡大に繋がったのである。以上のように、松喜醤油の経営拡大に際して、醤油が地域性に即したものに変更されたことが重要であった。